
太陽がある場所

秋元愛羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽があたる場所

【NZコード】

N60380

【作者名】

秋元愛羅

【あらすじ】

有無も言わせずの天才が居た。だが彼女はどこか孤独だった。そんな彼女が高校進学して出会ったのは一人の少年。彼は、出会って10分後・・・・・・

最近は暗い雲が覆っていたのに今日は珍しく空が青かつた。

まるである日みたいに。

「漸、今日は約束の日みたいだね」

まだ眠りこけている彼の頬をなでる。

私が触つてもピクリとも動かない彼はいつも深い眠りについている。

病室のベットで。

通い続けてもう4年。

私も私の周りもいろんな変わった。

そして大人の一歩を踏み出し始めた。

だけど君だけは止まつたまま。

君だけは18歳の少年の姿。

あの日からずっと君を待っている。

今も昔も未来も。

ただ君に

「お帰り」

が言いたくて。

序章（後書き）

不良と私に出てくる悠理が主人公となっています。

桜が咲くこの季節にとんでもない新入生がやつてきた。その噂は瞬く間に広がった。

帝楠学園中等部からの新入生。

彼女達はやがてこの学校を揺るがす存在となつた。

「悠理、悠理つてば」

目の前には大きな桜の木がある。この木は学校が作られる前に在った木で作る際若い木だったこの木だけは残しておこうと言つことで一本だけ変なところに在るのだ。

今ではこの学校の象徴ともなつてゐる。

その木を見ていた時に声をかけたのは私の親友でもあり、従姉妹でもある佐々木優菜。

結構容姿も似ているし何故かユウツで言つ子を使っているから間違えられやすい。というか間違えられた。

まあそれはいいとしてもうそろそろり答へないと。

バッシン

「いっ

「ぼーっとしない……。

たたかれる。

「痛い」

「悠理が悪い。ほら、行くよ。始まっちゃう」

「うん、分かった」

今日は部活動初日。昨日、届出を出したところだ。

今でも思い出されるあの学園を去つていったあの日。

「どうしてあんな無名の学校にしたの」

「あなたの実力ならスポーツ推薦で桜台高校にでもいけたのに」

「実力を捨てる行為だわ」

元仲間の言葉が今でも突き刺さる。

彼女達の関係は淡白だった。

コートの中での偽りの仲間。

通常はただの他人。

なのに日本一に輝き続けてたのは個人個人の実力が高かつたからだ
うひ。

私は時田悠理。あの学校で天才と呼ばれた人の子供。そして彼女と
同じように天才。

「へえ、優菜はマネやるんだ？」

「うん。悠理は選手だけどね」

そつか、と言う面々。聞いた所同じバスケ部員になる予定の子達だ。

あまり人と関わりを持つことを控えている私にとつてあの学校を出
る決断をしたこと自体奇跡なのに優菜は他人と交流させたいらしい。

クラスの中で十分なんだが。

「バスケ部入部希望の人は付いてきて。勿論男子も」

女バス（女子バスケ部）の部員と思われる人が声をかけた。

それと同時に色んな人が中へと入っていく。

最後でいつか、なんて思つてると優菜につつかれた。

入ろうとしていた男子が私に気を使って待っていてくれていたらしい。

別によかつたんだけど。

そんなこといつたら彼の親切が無駄になので言わないで置く。

「行こう」

優菜の言葉に込められた意味をしつかり受け止めながら歩き出した。

それから先輩に言われたところで事前に言っていた体操服に着替え、バスケットシューズを履き替る。

真新しいバスケットシューズでキュッキュと足をこすり出す。

いい音。

この音に何度も落ち着かせられるだろうか。数え切れないほどどの記憶が蘇る。

そしてそのたびに私は何を思ってきたのだろうか。

あの場所で見つめていたものは何もなかつた。

私にあつたのは“彼女”を超えることだけ。

「新入生集合」

さつきの先輩のところへ向かう。

もしかしてこの人はキャプテンなのかな？

その声にみんなが集まる。

「どうせ自己紹介だろうな、そういう易に思つていたらいきなりゼッケンを渡された。

あれ？ なんでゼッケンが来るの？

「初心者とマネージャー以外はゼッケンを着て。

今から毎年恒例の行事、同じ新入生の男子と試合をしてもうから

「「え～～～！」」

自己紹介なしでいきなり試合？！

「じゃあ、ガードの人は手を上げて」

驚いている間にチーム分けが始まった。

ありえない。いや、もしかしたら高校特有とか違う学校だから？

だけど周りの反応も私と同じようだ。先輩達は笑ってるけど。

そう思つて、いる間に分けられていた。

そして簡単に分けられたチームでの自己紹介が始まった。

透、海、美咲、紹香。美咲と海は同じクラスの子だ。

話すと意外に馬が合ひ、そこで話を聞いて、面白い。なんだか個性的な面々だ。

うん、なんとかやつていけそうだ。

パンパン

手の鳴る方を向いた。

ホワイトボードに何か書いてある。よく見るとA・B・C・Dと上
下に書いている。対戦相手が決まった感じだ。

「今から10分間、試合をしてもらひつかひ」

それを聞いてなんかワクワクしてきた。

何ヶ月ぶりだらうか、試合をするのは。

簡易試合でもひさしぶつだ。

その時だった。

「え～女子とやるんですか～？経験者つていつてもひまんなくない
ですか」

1人の男子が叫んだ。

みんな、彼の方を向いている。

黒髪で綺麗な顔立ちをしている。

なんか要ちゃんが好きやつなさわやかな感じを受ける人。

後で隠し撮りして要ちゃんに送りつけようかな。

まあそんなことは後にしなんとなく雰囲気が悪くなるのを避けたいのだが無理そうだ。

と黙つた堂々といえる彼は度胸があるといつか、怖いもの知らずか。

案の定・・・・・

「何あいつ。女子だからっていつ理由でつまんないとひどい」

その言葉に相づちを打つよつて思ってのじを言つてくる。

でも彼は気にした様子はない。

確かに言こすきかなと心の中で女子に同情する。

私も女子だけどね。

新入生の中では勃発しそうなことを気にせず、といつか見ない振りを

して先輩は笛を鳴らした。

それと同時にやつきの男子も並ぶ。

私たちと対戦する相手の一人だったのか。

「頑張つてー」

「あんなやつに負けるなー」

みんなの言葉にイラつと来ているのか応援が激しい。

まあいいか。

私は楽しむだけだから。新しいバスケを。

私は目の前のコートに走り出した。

「お願いします」

こうして試合は始まった。

そして試合が始まつて気づいた“盲点”

それは私たちにはチームワークがない。

当たり前だけど動きがバラバラでバスが上手く機能していない。

かるうじて点差がないのは相手のショートミスと私や透達のスリー
ショートが入つているためだ。

「つまんない」

その言葉を撤回しないといけない。

今、本氣で楽しい。

特にユーリ、と呼ばれていた無愛想だった子。

スリーを外していないことも凄いけどあの軽やかな動き、それを可能にする判断力。

男だったらこの子と組めたのに。そう思つ。

まあそれは彼女に失礼か。

それとあの笑顔。

初めはクールで無愛想だと思つてた。俺の挑発にも冷静に対応してたし。

でもバスケをやり始めた瞬間笑つていった。

特にショートが決まったときの嬉しそうな笑顔。

その顔は可愛くて今まで見てきた笑顔の中で一番最高で俺のタイプそのものの笑顔だった。

俺はあの笑顔が欲しい。自分の物にしたい。いや、彼女自身がほしい。

彼女を見るたび、ぞくっとするほど湧き出てくる感情。

こんな気持ち初めてだ。

コレが女子がよく騒いでいる“恋”

しかも一田ばれと言ひやつつか・・・

俺には無縁の世界だと想つてたのにな。

彼女のプレイを見ながらどうやって彼女を手に入れようか考えていた。

「ジャンプボール」

美咲がジャンプボールを取った。

なんとかこれで並んだ。ほっとする。

だけどこれで点差が埋まつただけで気がぬけてらんない。

ブザービーターされて逆転、なんてありえる。

最後の一秒まで何が起るかわからないのがこのスポーツの面白いところなんだけれど。

「なあ。俺、今からお前につくか！」

前触れもなく急に声をかけたのは女子を罵つて現在ブーリングされているあの彼だった。

「・・・何でそんなこと」

普通、そんなこと言わないの。・・・

その前に状況によって変わるの。・・・

なんで？

そんな疑問に答えるはずもなく続ける。

「だからスリーはするな

「あの、何がしたいの？」

「タイムン」

「オール1のことかな？」

（一対一ですること。）の場合彼はティフォンス、彼女はオフェンスになつて戦いたいということ）

本当か？今のところここだけがショートをしていない。

だからこそ信頼出来ない。

でも真剣な目付きだ。

「何が目的なの？」

「俺、真剣勝負でお前からボールを取りたい。」

この内容からすると私は気にいられたみたい。

「いや嫌がるもの半だけ私も試合中同じような事を思っていたのは事実。

「いいよ」

「ありがとうございます」

そう駆くと走つていつてしまつた。

だがなかなか勝負の場はやつてこなかつた。

でもボールの音が響くたび、早くチャンスが来て欲しいと祈つた。

そして・・・・・ラスト45秒

「ユーリ、こっちへ

「無理」

ちょうど1分切ったところやつて来た彼女との勝負。

俺と隼人がバスをさせないようにしているから俺を抜かないといつて
ルには入れられない。

まあ、後ろにも居るみたいだから抜いた後出来るかどうかは分から
ないが。

ポン、ポン

持ち方が変わった！！

フロントをしながら止まつた。

(左右の手を使いドリブルする」と)

とこういふことは俺を抜くつもりだ。

だがやることは一つ。

バックロールしかない！！

（片手でボールを持たないよう体の遠心力を使い回すこと）

このやり方なら何回も止めたことがある。

右！

「漸、動くな」

！？

いつの間に後ろに…

シユツ

シユートする音がする。

そして

ボーン、ボーン

空しくボールが響き渡り・・・

ピ――

「試合終了」

合図がなった。

俺は

「やつ、やつた――」

負けた。

あの彼はまるで魂が抜けたよいつて立っていた。

なんかちょっとかわいそつなことをしたかもしれない。

多分自信があったと思つ。

「生きてますか？」

普通はそんな聞き方じゃないだろとか言わないで。

自分から話しかけるの苦手なんだから。

「生きてるよ。あの時何したんだ？」

あ、返してくれた。ってん？

「あの時つていつですか？」

「フロントして」

フロント?なんだっけ?いきなり専門用語いつなよ。

えつと。あ、ポンポン。

「右にボールを止めたあと

ビハインド・ザ・バック

(ボールを背中に通すこと)

して、左にバックホールをしただけだよ

その言葉に驚いたのかまた固まつた。

どこに驚いたのか聞いていいかなあ。

記憶の片隅にあつた用語を使つたから自信ないんだけど。

「なあ、名前は？」

長い沈黙の後に返つてきた言葉はこれだつた。

「時田悠理だけど」

「ユーリ、彼氏いる？」

「いないけど」

「へへそりなんだ」

・・・・今更ながらわざわざから何聞いてんだ?

わざわざまで試合中のこと聞いてたの?。

それを疑わず答えちゃってる私も馬鹿だけど。

「じゃあ、ユーリ。俺と付き合って」

「・・・・はあ?」

その瞬間、周りが止まって私達に視線が集まつたのを感じた。

まず、何言ってんだこの人。

だってコートのほぼ中心で会つてから10分ぐらいしか経つていない私に告白をした。

ときめく要素なんてなくない?

まだ“すごいね”とか“男だつたらよかつたのに”とかなら分かるけど。

「ね、いいでしょ」

そう言つとこいつは事態をまだ把握していなくてパニクッている私

に對して理解できない行動に出た。

私を引き寄せて……

チユ

キスをした。

田と脣の感触を疑つ。

「一トの真ん中で痴白した。まあいいがではいい。

ただこいつはその後キスをした。

しかも私にとってはファーストキス。

考えられない。

一応こんな私でも乙女な部分があつて。

好きな人したいといつ思ひはあつて。

悪するに最低と言つたいわけで・・・

その後体育館にパチーンという音が響きそいつの頬に綺麗な赤い手形がついたの言つまでもないだろ。

最悪な事件が起きた。

まだ自業自得なら許せた。だが、これは違う。

人災だ。

私のせいじゃない。

あいつのせいだ。

あいつに向かつて叫びたい。

「おまえなんか大っ嫌いだ

！――！」

次の日

私は英訳と戦っていた。

バスケしか目になかった私は勉強は出来なかった。

それは公立に入つたことさえ奇跡としか言えないほどの学力。

だから普通は宿題は昨日やつておくものだなど忘れた。

やり忘れたんじゃない。

思い出すとよみがえつてくれるあいつの感触を忘れて寝たうじつ
行く時間だったのだ。

「分かんない。

なんでも○にはたくさんの意味があるわけ?

「一つにしろよ~」

乱雑に置かれた教科書、ノート、辞書。

今はそれと戦っている。

「つて言われてもね。早くしないと先生が来ちゃうよ」

「うぐ

半ベソになりながらもやり続ける。

今日は絶対に当たるのだ。

その時私の背中から力が加わって来る。
え？

「この学校にはそんなことをしてくる親しい友達はまだいない。
まあともと前の学校にもそんなに親しい友達なんていなかつたが。
それはいいとしても、この学校に優菜“以外”私の中学の奴は誰もいないはず。

一体、誰？

「このことは不定詞だよ」

上から降ってきた言葉。

この声なんか聞いたことある・・・

嫌な感じはするがまずは確認することが先決だ。

ゆっくりと顔を確認する。

私の視線に気づいたのかにっこりと笑うやつ。

忘れるわけないこいつはあのときの・・・

「あ~~~~~！」

そこには会いたくなかったやつ。いや、部活に行けば絶対に会うんだけど。

「お久しぶり、ユーリ」

「帰れ！名前の知らない奴に呼ばれたくない」

「あ、そっか。まだ自己紹介してなかつたね。」

「1年8組、川岸漸。漸つて呼んでね」

は、8組つて…

「やっぱり特進組だつたんだ。お久しぶり、漸

さつき英訳を教えてくれていた友達が反応した。

「お久しぶり~」

「あのさ英訳の邪魔なんだけど…」

実際問題本当のとこ。

「あ、『」めこ」

と、言いながらもどうかない。

どうこうの神経してんだよ、そいつ言いたくなる。

「やつたらやる消えてくれないかな」

いや、すぐやめ消えりーーー

あんたのせいで静かな高校生活が崩れかかってるじゃない。

昨日の時点で崩れてるナビ。

「照れなくてもいいのに。恋人同士なんだし」

それ、爆弾発言ですから。

その言葉にクラスの視線が一点に集まつた。

そのせいでさつきまで騒がしかつたのが静かになつたじやん。

完全に注目の的。

ああ。もつだめだ・・・逃げられない。

隣にいる恵子も言葉を失っている。

私だつて言葉を失いたいけどそれこそ危ない。

これは言つたもん勝ちだ。

「全否定してあげる。私はあんたと恋人になつた記憶はない」

「でも昨日キ」

すかさずこいつの口をふさいだ。

忘れない過去なのにこいつは…

「まさかユーリ、 “あの” 漸とキスしたの？」

あのは気になるけど今はそこじゃない。

「してない、してない」

下手な作り笑いをする。

だけど肝心のあいつはいつの間にかいなくなつて代わりに付き合つているという噂を残していく。

クラスの居心地は…悪い…悪いすぎる。

それから授業が終わり今度は教室移動。

正確には質問攻めを回避してきたところだ。

「もう、やだ」

「どうした？ 英訳のところならちゃんと答えられたじゃない」

隣で今の今まで私をクラスメートに売った恵子が気にして言つ。

「そうじゃなくてあいつのこと」

「ああ、漸のこと。別にいいじゃない付き合つたって」

むしろ面白いし、と付け加える薄情な人間一人。

唯一私に話しかけてくれた友人第一号は楽しければよしの人間だったことに後悔する。

「よくない、ぼけえ！！

確かにかっこいいし、勉強もできるみたいだけど絶対にいや。

嫌なもんは嫌だ。

あいつこななやつとおもふべるわけないじやん。

そいつ簡単に許せぬもんじやないし。特にわ、キスとか・・・・・・・・

それじやなくしてはそれから嫌でも顔をあわせるハジキにならぬのハ。

ああーーもひーーー聴き

完全に愚痴つてると急に視界が暗くなつた。

「だーれだ」

聞き覚えのある声。ほつと安心する。

ん、あれその前にーんな子だっけ。

そいつ思いながらも答へを言ひへ。

「優菜」

すみじぐーつと云ふを寄りたがる。

え、は?

「ユーリ、一時間ぶり～～」

「噂をすれば」

「そこ感心しないの。

抱きついてきたやつを必死で食い止める。

この際格好とかは気にしない方向で。

「優菜、なんでこいつも一緒にわけ？」

「何となくかな」

苦笑いをしつた顔をしている。

この顔は優菜が連れて来たわけではないらしい。ただ、ついてきただけ。

いや、優菜の性格上そんな事はない。

「ユーリ、暇なんだけど」

「知るか。どうせ授業中寝てんでしょう」

「ユーリ、一応言つておくけど漸は首席だよ」

「・・・」

一瞬にして力が抜けた。

こいつが首席？本当ですか？優菜さん。

こんな、こんなやつが首席。ありえない。

ずっと優菜が主席だと思つてた。

そして優菜を超えたのがこいつ？

「お、尊敬してる？ユーリ可愛い」

ボー然とたちつくす私の頭を撫でてきた。

いや、意外に優菜より頭いいことにびっくりしてるだけでつて思つてる場合じゃない。

つーか触るな

これで納得した。

「違う。大体あんたの事、私は知らないしあんたも私の事知らないでしょ。

そいつは考へ込んだあとに「うう」と笑つた。

「大丈夫。

今分からなくとも3年もあれば分かるでしょ」

それも当然の」とぐ。

それから一度言いいタイミングなのか予鈴のチャイムが鳴つた。

「じゃあね、ユーリ」

手を振りながらクラスに戻つていくあいつ。

めちゃくちゃムカつくんですけど。

シユ

カラソカラソ

ドン、ドン

ドロップルショートの練習中

「ユーリ、」めん。変なところにいた

「別にいいよ。気にしないで」

心の方は揺れても体の方は大丈夫…か。

当たり前か。

見放されてからずっとこんな感じだったから。

練習以外関わらない、話さない。

試合に支障が出るも「ない」とはしない、やせない。

でも何でだらう。何も変わつてはないのに。

心はもやもやする。

原因は分かつてゐるけど効き目ないし。

情け無い。

あれから変わらうと決意したのに動けない自分が憎い。

「ユーリ」

ぎゅっと後ろから抱きしめられた。

本田亜回田。

「ため息すると幸せが逃げてくれる」

超二二二二二の顔を見てイハウときた。

「あなたがせいで悩んでるつて言つた」。

デリカシーつて言つもんがないのかこいつの頭ん中には。

「ウザイ。大体さあ、私のことからかってるでしょ」

「からかってない。本当に好きだもん」

もんつて子供か！

「冗談言わないで。それと勝手にくつついたりしないで。

恋人でもなんでもないんだから。

それし変な噂とか立つたりしたら嫌だし、そういうの迷惑だから

そいつ言つとあいつに背を向けて歩いた。

歩いていたら優菜が近付いて来た。

「悠理、言ひ分は分かるけどちよつときつあるぞ」

優菜が怒っているのは分かってる。

でも私には関係ない。

「ひつこのせはつもつときつまたまつがいいと想ひ。

「悠理、漸は…」

「あいつの話はしないで」

そう怒鳴つて歩き続けた。

怒鳴つてから3日が経つた。

あいつはあまり、というか一切近づかなくなつた。

人の噂も七十五日と言つけれどそれよりも早くクラスのほとの熱は
すぐに冷めた。

なぜだらうか。

そして何故あいつに言つ過ぎたと思つ自分がいるのだらう・・・
・?
・?

昔はそんなことなかつたのに。

人に言いたいことははつきりと言つ。

それが私の信念だったから言いたいことを言つても何も思わなかつたのに。

「珍しいな。優菜ちゃんがこんな時間に来るなんて」

「悠理は上ですか？」

「ああ。帰ってきてから元気なことだよ」

「やつが…あいがといひやつこます、おじいさ」

ゾンビ

階段から足音が聞こえる。

お父ちゃん?

それともじーじ?

でも畠のコズムが違う。誰だかわ?

トントン

扉を叩く音がある。

「悠理起きてる?」

「優菜ーなんで」こんな時間?」

なんでいるの？

「氣になつたの。なんとなく」

ああ・・・やっぱり私のこと氣になつてたんだね。

昔から「ひこひ」とは優菜に話してたっけ。

懐かしいな。

私たちが血がつながつていいことが知らなかつたの時から相談事はずつとしてた氣がする。

いつもは私が乗るほうだったから。

「優菜」

「びつしたの？」

「私、やっぱりダメだね。

本当に伝えたいことは伝えられなくて。

感情の「ヒストロールもできなくて氣づいたらそのまま突つ走つてる。

あの時と変わつてないよ」

変わりたいと願つてゐる自分がいるのに変わらない自分が嫌い。

一層のこと私なんか消えてしまえばいいの…

そのぐらい自分が嫌い。

「悠理・・・・

あのね悠理、今日の話なんだけど。

あの子がね悠理のこと根も葉もない噂をしてた子達にいついつたの。

悠理のことよく知らないくせに悪い風にいつなつてね。

誰だと思つ?

考える。

でも見当がつかない。

まずそんな事が言える友達はいなばず。

「誰?」

「漸だよ。

私、あの試合の次の日漸に怒ったの。私も8組だし席が近いから。

ユーリを遊ばないでって。

そしたら真剣な顔をして本氣で悠理のこと好きだよって言ったのよ

本氣で…好き?

まさか。

「ユーリ、もし素直な気持ちを伝えたいなら明日一緒に学校に行かない?」

「な、なんで」

私の言葉を聞かず

ドンドン

と行ってしまった。

優菜から漸の事を聞いた。

たつた10分で告白し私のファーストキスを勝手に奪つたやつだしまさと爆弾発言ばかり言つてしまつたこともたくさんあるけど。

でもやつぱり私は
・・・

チャリン、チャリン

短くしたスカートにシュシュでつしばりにした優菜が来た。

なんでこんな早い時間に。

いや、その前に田をつけられる格好だよ。いいよね、頭いい人は。

私なんか何もしていらないのに田つけられてるんだから。

「おはよ、悠理」

「おはよ、ひなみ、優菜」

自転車から降ると一緒に歩き始めた。

去年では考えられない光景だ。

去年の私たちは仲間といつ名だけの檻に入れられた縛もないただの選手の集まりのようなものだったから。

歩いて20分。いつもよりも早い時間に校門に着いた。

どこから卓球のピンポンの音やら野球のバットにボールが当たる音がする。

でもその中に微かだが聞きなれた音がある。

どうして?

だってバスケ部は朝練なんてないはずなのに・・・

「な、なんで」

「実は体育館で朝練しているのは演劇部だけなの。

コートの方は使ってないから自主練していいんだけどほとんどの人が知らなくて使ってない訳」

「へ~」

そうだったんだ。初めて知った。

「それじゃあ参りましょつか

「どうだ?」

「漸の所に」

優菜に強引に連れていかれた。

強引はいつものことだけど、出来れば自転車を置いてからと重つて聞かないから意味ないか。

はあ。心の準備ができてなんですけど。

それでも体育館に着く。

そして体育館には一人の男子がいた。

優菜はかまわず扉を開ける。

彼はそれに気づいたみたいでこちらの方にやって来た。

彼は誰も来ないとつっていたのか、それとも私たちがここにいるからかかなり驚いている。

それは当たり前のことかもしれない。

「漸、おはよー」

「あ、おはよー」

こいつの視線はこっちに向けられているが合わせたくないでの顔をそむけ右だつたり、左だつたりと不自然に目をそらしてしまつ。

「ユーリがね言いたいことがあるつて。

「私、付いて来ただけだし自転車を校門の前に置いたままだからあとでね」

え？

「ま、待つて。ちょっと待つてよ」

呆然と去つていく優菜の後姿を見送る。

そのために自転車を置いて来たのか。

優菜にやられた…つーか見捨てられた。

「言いたいことって何？」

いつの間にか私の目の前にいた。

いきなりですか？

前置きとかさせてよね。

「あ、あ、あの…、その…」「めん、なさい」

頭を下げる。

「え？」

「あの…、なんと聞つか…」

「言ひすぎた？ もうじやなくて別の言い方があつたといつかど、とにかくはじめんなさい」

私はもう一度頭を下げる。せつせつとより深く。

「ゴーリ、顔を上げて」

言われた通りにすると突然強い力で抱きしめてきた。

突然のことだし背中をもつていないと体勢が崩れてしまつぐらいい強く抱きしめられて体が反つていて。

な、なんで？

なんだこんな」とが起きているの？

まず何で抱きしめるの？

どう反応すればいいのか分からず私は無意識に体を縮めていた。
するといきなり目を合わせてきた。

か、顔が近い。

「可愛い。めっちゃ可愛い。

どうすればいいんだ? ついこのときのコーリ、すり減り「可愛い」

そういうと頬にキスをした。

は…?

え、話が食い違つてる?

とこつか何してるのでサクサにまきれて。

「話の内容分かる?」

「うん。3日前のことでしょう」

あれで分かるんだ…ってちょっと待つて。

「怒つてないの？」

結構言こ過ぎたから

私でも結構言こ過ぎたって思つてゐるし。

「全然。中学の時じょつちよつと罵られたし」

「じゃあ、なんで3日間も近づかなかったの」

「ん~とね。

1日田は友達の宿題を手伝つてて2日田は反省文の手伝いで3日田は教室掃除の手伝いかな

近づかなかつたのではなく近づけなかつたのか。

呆れた。

「もしかして3日聞えなくて寂しがつた？」

「誰が一氣になつただけだから」

「つづりとおもいつきつ突き飛ばした。

それでも男の力には勝てなくて。

「ユーリ可愛い～」

「可愛いくない！」

ムカつく。

やつぱりこいつ私の見た中で一番の変人。

初めて見た素顔。

ユーリが無表情、無感情になつたのは私を含め、あの場所にいたバ
スケット部員達。

あの頃の私達はユーリを尊敬しそして憎んだ。

分かる？

どんなに練習してもうまくなつたと思つてもすぐに抜かされてしまつ
気持ちが。

たくさんいる部員で争つてゐるレギュラー枠を何気ない顔で見られ
る気持ちが。

特に上の先輩たちはものすごいかった。

だがそのせいでユーリは感情を捨てコートに立ち続けた。

だから漸のあの行動は今後のコーリに影響が出ると思った。

でも、もう大丈夫。

漸と関わることでコーリは変わっていく。

ほらもう変わってる。

もしかしたら漸がコーリを失った感情を取り戻してくれるかもしない。

そして新しい感情も芽生えてくるかもしない。

それは漸しだいだけだ。

「優菜……お願い、こいつをはがして」

「コーリ、こいつは止めない？」

一応、名前はあるか？」

「え……」

「こいつに味方するの？」

「ね。いよね」

追い打ちかるよつて匪へ。

優菜まで言われると…

「つとか、川岸」

「ユーリ、大好き。愛してゆる」

「くつづくな～」

私の言葉を聞いて優菜は笑いだす。

「どうかした?」

「あ、いやなんでもない」

そういうと漸に近づいた。

「漸、この下、全然素直じゃないけどよしへね

え?何、今の…その“よしへね”的意味。

まさか私売られた…?

「おひ。任せとこへ」

呆然と立ち尽くす私の隣には張り切つて いるあいつがいた。

時田悠理、15歳。

初めて従兄弟であり信頼している人に売り飛ばされました。

しかも相手はわけ分からぬ変人。

これから先、どうなるんでしょうか・・・

6月。

梅雨に入ったので超蒸し暑い。

じめじめして気持ち悪いし、おかげでイラマMAXなんだけ
ど…

「悠理、おはよー」

朝から後ろから抱きついてきたやつ一名。川端だ。

慣れてきたけど毎回、毎回…

「毎回重いから抱きついてるのやめない?」

「えー」

不服そうに私を見ている。

「ひは蒸し暑くてイケつこてるの。」

だが私の思いとは裏腹に顔を近づけてきた。

き、危険！

そう思い私は川岸の体を押した。

だけど私の行動は見破っていたみたいでうまくかわされて抱き合
う形になる。

「今日さあ、カンドンが1時間目だからダルインだけど」

「はいはい。分かった、分かった」

力いっぱい放そうとするがそれでも離れない。

毎日、毎日、暇さえあれば私の所に来るおかげでなぜか私のクラス
に溶け込み教室にいてもバレないほど。

また正式交際者として先生達に認められた。

それから周りには知らない人はいないほど周知の事実になった。

だからいつもして抱きしめられても誰も文句は言わないし冷やかされ
もしない。

出来れば文句でも何でもいいからを言つて欲しかった…

そのおかげでこんな状態でも誰も注意はしない。

だから」と書いて悪い」とばかりが起きた訳ではない。

漸のDF（バスやショートを妨げる役割）は、とても上手く教えて貰っている」ともしばしばある。

それ以上に「つっこむべき」。

でも物の使い道といつじだ。

・・・・・なんか言葉の使い方が違つ氣がするのな氣のせいだ。

部活中

ドン、ドン

「はい！」

2対1の練習中
(オフェンス2人とディフェンス1人)

男子と一緒にだから意外に面白い。

「とつた！」

シユツ。

珍しい、川岸とやるのか。

相手は…出雲先輩。

センター ラインを踏んだ途端にDFに入った。

動きが早い。

さすが、川岸の元中の先輩。

ためらつてたら叩かれる。

フヨイクで川岸に通つたバス。

川岸の目からやりたいとサインが出でる。

はーはー、やつていいよ。

そう思いながら受け流す。これは〇〇とこいつ意味。

それを見た川岸は嬉しそうにスリー・ショートを放つ。

ずっとといつしょにいのせいでいきなり俗に言ひの愛の告白を唐突に言う、TOPを考えないで抱きしめる等の行為を受け流せる技術とか、関係ないものまで身についてきたような気がするのは気のせいかな。
・
・
・
・

そう思つていながらボールの軌道を見て、ああ今日も届かなかつたようだと判断し走り、出雲先輩の前に落ちつとするボールをジャンプしていれる。

だが体勢が・・・崩れるー！

その時、何かが当たりゅつくり足が地面に着いた。

「ナイシコ、ユーリ」

「あつがと」

正直にお礼を言ひ。

もし受け止めてくれなかつたら穢れでいたくなかった。

だけど・・・・・・

「アリ……こわやつへの後」

「はーい」

いやつこひないつひの。

そつ思ひながらパートの外へ出る。

キンコーンカークン

「集合口」

「はーい」

部活が終わつた。

最近早く終わるなあ。

そう思いながら片付けを手伝い私は急いで制服に着替え体育館を後にした。

「あれ? ユーリは?」

俺は悠理を探す。体育館には居ないようだ。

「先に帰つてつたぞ」

いつも帰りは一緒に帰つている友達がやつてくのも聞いた。

「えー。一緒に帰えりうつと思つたの」

今日ひねまつて思つてたのに。

最近慣れてきたみたいであたふたしなくなつたからどうにかして俺に向けてくれるようになつた。

あとが前呼ばせたい。

「それよつと、漸。ちよつと寄り道しねえか?」

「いいナド……」

「コニコ言つてくる友人の頼みを断るわけもいかないし、今日は母さんが早かつたはず。

別に遅くたつていいよな。

「はい、決定！ お～い、透達もこねえか？」

「行く～」

それにしても悠理つて徒歩圏内なのになんて早く帰つてんだから。

まあ夏になるからと一いつて暗くないわけではないし。

でもいつも行きは優菜と一緒に来てるけど帰りは一緒に帰らないみたいだ。

「ただいま。すぐ準備するから」

家に着くと田の前には好きな光景が広がる。

「急いでくれよ」

「はーい」

私の家は商業地でレストランを経営している。

だからいつも店の手伝い。

本当は商業科に行ってから調理学校を行きたかったけど学力が…

「悠理ちゃん、ドリアンーつね」

「はーい、酒屋のおじさん稚奈さん口説かないでね。おにいが部屋に籠もるから」

「分かってるよ」

あまり人は来ないけどお得意様がたまに来ててくれるからしゃべって楽しい。

もつと多くの人に食べてもらいたいと思つてるけどいい方法が見つかんない。

でもこれもいつかなつて思う私もいる。

「最近、ユーリちゃん楽しそうだね。学校でいいことでもあったのかな」

「多分そうですよ」

カラソ、カラソ

「こりつしゃいませ。」

あら、初めてのお客さん?「

初めてのお客…?

珍しいなあ。誰だろ?「

気になつてひょこと顔を出した。

あれ? ものすごく見覚えある人達が・・・・・

「ユーリ、なんでこりこ

やつぱり透たちだ。

と、いつもとは奥に居る見たくもないあいつは・・・

「ユーリ、大好き!ー!」

やつぱり、こいつか。

稚奈姉と酒屋のおじさんが呆然としてるよ。

よぐ、人前で堂々と・・・・

しかも川岸は知らないと思つけど、私の家なんだけど。

やめて欲しい。すつゝ恥ずかしき。

「はいはこ、離れてね～」

『仮にしてない風を装つて離れるものと呟く。

「ソレで反応した向かい離こやうやう離われるのが田に見えてる。

だなびそんなソレで離れるよつねやつじやなへて。

「やだ、そのままがいい～」

なんかハートマークが三岸の周りに浮上してゐるよつね...

今、そんな錯覚に陥つてゐんですナビ。

私の目が幻覚を見てるのかな・・・

それだつたら早めに眼科医行かなことなつて思はれてる前。

カラソ、カラソ

「あれ?みんな...あんたら何やつてんの。

ユーリ、仕事サボると起いりやがるよ

「どこがだ！川岸が抱きついてきてとれない状態なの」

のんきに行つている優菜に渴を入れる。

「あ、その子が優菜の言つてた川岸漸君ね。

はじめまして。時田稚奈です」

「はじめまして。川岸漸です」

あいつは私から離れて稚奈さんと仲良く話している。

動けるようになつたけどなんかムカつく。

そんな様子に一人笑つてゐるやつが居るとも知らず川岸と稚奈さんの姿を見ていた。

「ねえ、なんで働いてるの？」

「氣になつてたのか透は聞いてきた。

ああ、帝楠出身で「ひ」と知つてゐんだつけ。

「え？ あ、『』、私の家」

「……え？」

驚かれてもなあ……本当に私の家だし。

「じゅあじつして帝楠にいたの？」

「特待生制度？」

「そんなんじゃなくて……なんか決められたつていうか……

「そんなんだ」

（実際は優菜のお母さんのおかげだけど。そんなことこつたら怒られかかるからやめておけ。）

稚奈ちゃんと話終わった川岸が来た。

それと同時にキッチンの方から足音がする。

ヤバい、お父さんだ！

「こいつがいつちに来るってことは絶対くつこてくるに違いない。

ここにくる所を見られたらおしまいだ。

くつこてくらあこつから逃げよつしたその時肩をつかまれた。

まさか「こいつ…私は悪夢を思い出だす。

思い出したく無かった。いや、思い出す気もなかつた。記憶が鮮明に蘇る。

唇の感触も

甘い吐息も

身体の温かさも

あの時と全てが同じ。

ただ違つてゐる所は

今はコートの真ん中ではないこと

やがてあいつの顔が離れていく。

こいつの思考回路が分かんない。

いつたいこの首席は何を考えているんだろう？

それとも誰でも分かるが私だけ分かっていないだけなのかな？

どちらにしろこいつは私の家族にたいする境地が危うい。

特に大黒柱に見られた以上は。

それは私にとつていいことなのだがちょっとは心配しておひへ。

「君、悠理の彼氏かい？」

そう言つてお父さんはあいつに近寄つた。

「はーーー川岸漸といいます」

「気合十分で答える川岸。

だけどそれぢうぢうではない。喧嘩」とはーやはなんだけじ。

やつ思いながら見守る。

ん？待てよ。

つかのお父さんの性格を一から考えてみると・・・

「漸..君でいいよね。

漸君、悠理のこと頼んだよ」

やつぱり~~~~~

うちの家、じゅごじゅごと（恋愛）と（恋愛）で闇じては前面的でわかる
んだった。

お父さんへ

『本人たちがやつしたいなやつをせなこと』

うう。

それはいいとしてなぜ、そこ頼むなの？

なんか結婚・・・

三つの恥ずかしくなつてきたからやめよ。

「昔から海理に似てこじつぱつで素直では無かつたから心配してた
けど」

漸の手を取り力を入れた。

「悠理を頼む」

「はーー！悠理を幸せにします」

お父さんの、お父さんの馬鹿ーー

なんぞそんなやつを認めるのー

その前にまだ私未成年だぞ！

ちよつと反対しやーー

と三つがお母さんが意地つ張りとかそういうのではなくてあなたが
しつこい位迫つたからでしううがーー

そい、何年前から説明してるんだから分かって。

やして川岸！――

私はあなたに幸せにして貰つて貰なきゃいけないな――。

とこりかこりから私たちは川岸に立つてゐる――！

だがそんな思いもむなしくお父さんと三井せゆゑく喋つていた。

「生きてるか~?」

低い声がしたのと同時に頭を叩かれた。

憎まれ口はいつものことだけれどけやんとやめしがあるひとせ知つている。

だけどそれを見た川岸は何にムツとしたのか分からぬが

「ユーリ、おいで~」

と無意味にくつづいてきた。

私はそれを抵抗しながら振り返る。

「お兄達お帰り」

「お帰りなさい」

稚奈さんは嬉しかつだ。

「あのや、悠の彼氏。本当にこつでこいのか?」

暴言、暴力は日常茶飯事、そのへせ馬鹿だし。

一緒にいたつてつまらんぞ」

ナイス、にーにー！

内容はむかつくけど考え方直すチャンスをくれたには違いない。

「へ？ せうですか？」

可愛いし、バスケ強いし。

もともと俺のタイプなんで。ね？ ユーリ

その言葉を聞いた瞬間にーにーは笑い出した。

「あ～悪いい

笑いをこらえているがまだ笑ってるし。こいつ！ ！ ！

「悠が可愛いね～」

と小声を聞いた時はさすがに恥ずかしくなった。

私そこまでかわいくないし。去年までは男子に見られてたし。

それが少しコンプレックスだったりする。

「『メンゴーリ、もつねんねん…』

透達が遠慮がちに言ひ。

そつだ、そつさからドタバタして忘れてた。

しかも肝心の料理食べてもらひしないし。

「あ、また明日ね」

「うそ。 今度来てね

「じゃあね

そつこつと扉がしまつていぐ。

また明日ねつか。 初めて言われたな。

そんな気がした。

「俺も帰らなこと。 ゴーリ、また明日ね

そりそりと抱きしめて名残惜しつに離れていぐ川岸。

そんな顔をしないでよ。

最近、そつこつ顔を見ると弱い。

母性本能ってこうやつなのかよく分かんないけど。

だからなのかイヤって言えなくなつてへるじやん。

実際言わなくなつてるから。そんな自分がおかしくつて田を逸らした。

「ユーリ、そういう顔すると襲いたくなる」

そういうとグイッと抱きしめいろいろなとじみにキスを落としてくる。

わらわの言葉、却下。

一時的な情に流された私と好き放題やつてる」いつが今、最大の敵だ！！！

「わらわと帰れ！！

一発思いつきり殴つてそのまま川岸を外に追い出した。

ふう、やつと出でにつた。

額に付いた汗をぬぐう様な格好をした。

「お前に彼氏がなあ」

思い出し笑いをしながら話しかけるユーリ。

そんなに笑うことか？

ムスッとした顔で言ひ。

「見ながらに嫌がつてたでしょ」

「やうかな？やつもの悠…」

「何？お兄」

なんかよくなことのを言こやつなお兄を睨み付けた。

「あ、いや何でもない」

だけど何を言おひとしてたんだろう？

自分から言わせないようしたがやつぱり気になつた。

誰もいない扉を見ていた。

彼と会つてから見てきて分かつたこと。

川岸漸はムードメーカーでビートでもみんなの中心にいる存在。

誰でもしゃべれるそんな彼が羨ましい。

興味なさをひそめてる私に差し伸べた手を伸ばしたのはやつぱり彼だった。

その反面何故、彼なんだろうと思いつてしまつ。

私が望んでいるものを持っているそん彼が羨ましい。

これがあの入達の気持ちなのだろうか——？

夏の大会が終わる三年生の夏は終わった。

一年生は出れないため私たちは応援だった。

結果は初戦敗退だったがよい試合だったと思つ。

それから一年生を中心とした新メンバーとして男女ともに練習を開始してまもなくのこと。

いつもと変わらないある日の練習のときだった。

「集合」

「はー」

前触れもなく急に集まつた。

いきなり試合でもするのかなと思つていた。

そして・・・

「えーと。3年生がいなくなり1週間が経つ。

秋からの試合は夏、どれだけ成長したかで変わってくる。

なのでチームワークの強化と個人の実力向上に向け合宿を行ひ
合宿か・・・遅くまで練習出来る。

一応近くにバスケットゴールはあるけど電気が少ないせいぢやりづ
らい。

でも体育館なら広いし全体的に明るくて普段の練習と変わらないし。

「だが、合宿は練習するためで遊ぶ為にやるのではないからな」

ちひりと私の方を見た。

ああ、そういうことですか。分かりました。

いやいやいやするなって言いたいんですよ。

言つたや悪いがいやいやしてないし。

楽しみ半分、不安半分を抱えて合宿迎へ。

学校の近くにこんな所があつたんだな。

そう思つて見てゐるのは裏庭側にある中学のとき修学旅行で行つた民宿ぐらいの大きさもある建物だつた。

歩いて3分もかからないが裏にあるからか茂み隠れて見にくいからなのか1年生は誰も知らなかつた。

話によると学校の先生でも知らない人もいるんだとか。

その前に何でそんなところに建てる必要性があつたんだろう?

そして最初にやつはじめたのが・・・

「ゴーリ、布団運ぶの手伝つて~」

「うん、今行く

掃除。

最近使つたのは「ゴーリテンウェイーク」と書いてたけどホココ臭くて掃除中。

で、重い物を運ぶ主力となる男子はどういふと

「わあ~水出た!」

「ここに向けるんじゃねえ」

こんな感じで遊んでいる。

はあ、今日は練習出来るのかな…

男子がやらないため一部、部屋が多いこともあるけど練習をしないでその日は終わつた。

夜は誰もいないため自主練中・・・

ドンドンっと体育館に響いて昔を思い出す。

ただやけくそに「ゴールの目の前に立つていた幼い私。

それによつとでも触つとかないと感覚が鈍るんだよな。

「ナイシユ」

「川岸・・・」

「電氣付いてたから来たんだけど」

「偶然つて言いたいんじょ」

「ハコと笑う。

「当たり~ゴーリ、分かつてゐる」

絶対、嘘。さつきから人影があつたことは知つてゐるから。

だけじゃなことでもいい。

「なんとなくだよ。練習やらなー?」

「ユーツのね誘いなりこつでもやるよ」

「なにそれ」

私は笑いながら走り出した。

「こつのはまだ分からぬ。

何を教え何を思つてゐるのか。

でも少しづつだけ透達のことを分かつてこへると回りつつは
つくりでいいのかな?

そうしたらこつの思考回路がちよつとも分かることが出来るの
かな・・・・・?

そうじゃなければ今後の私の生活をこつのせいで翻かれるのは
もういじめんだ。

シコツ

ドン、ドン、ドン

「ふう、疲れた」

「休憩」

バタン

川岸は倒れこむように寝そべった。

私も川岸の横に座り込む。

「こんなに天井って大きかつたんだな」

そんなことを言つ川岸がおかしくて

「なにそれ」

つと、笑いかけると川岸が膨れて私を倒した。

「きやあ」

でも川岸の腕のおかげで痛くない。

目を開けると見たことない世界が広がっていた。

初めて知つた。

「いつもこの体育館なの。」

「ね？」

「うそ……」

感動してこのねとひに体を煽かれていた。

「ユーリの匂いがする」

「変態」

ヘンタイ発言が出てきてむかつくしゃうつむかつく起き上がる。

慌てて三度も起き上がりつれぬと抱きしめられた。

「ユーリのこと好きなだけで変態じやな……」

その必死さに驚いた。

ユーリがどうなのか?なんとなく押され謝るユーリ。

「「」あさ、聞こ過めた」

「許やない」

「や、許してよ」

「じゃあ、許すかわりに代わつて……」

「ヤツとした。

「ゴーリの中華の」と教えて

「あ…一生許せなくていいよ」

教える必要性なんて全然ないからね。

むしろ必要ないと思ひ。

「え、酷いよーゴーリ、お~願~い」

「いやだ」

ぐづつてこむ川岸を無視してこむとマツとしたのか抱きついたままの手の力を強めてきた。

なんかずつぐく密着してゐんですけどーーー

そしてやつくり顔が近づいてきて川岸の脣が耳元にあることが分かる。

微かに当たる吐息がじょぐつたい。

それを「まかすかのよひに声をかける。

「川岸?」

「ゴーリ、教えてよ」

一瞬で体温が上昇した。

そんなところで囁かないでよ。

毎回「れをされても全然慣れない私をからかってるのは分かる。

これに弱いこともいつには分かっているはずだ。

なんかむかつくなーーー

「ユーリ、耳赤いよ」

くすくす笑いながら見る「いつが今さらではないが憎い。

「だ、だつてあんたが囁くから…」

だから心臓の鼓動が早くなつてゐるんでしょ。

赤くなつてゐる私の顔に満足して髪を撫でている。

最近こいつの言いなりになつてないかな…

ちょっと心配するが気づいたら要求通りにしている私がいるのは確か。

結局かなわないんだよな、こいつには。

なんかしゃべに触るナビ。

「あのさ川岸、うちの学校を理解するために始めから話さないと
いけないから

「どうして?」

「私立帝楠中だから……?」

「ああ、小学校から持ち上がりの……

いこよ、話して

ゆうくうと息を吐いた。

この話を人にするのはたぶん初めてだ。

どうして話したいのかは分からないけど。

なんとなく、だけ話さなければならないうな気がしたから。

「私の学校にはスポーツ強化プログラム、とにかくものがあったの」
全ての始まりでもありスポーツを楽しめなくなつた原因は代々続く
このシステムからだらう。

それによつて私は得たものも失つたものもすべてが大きかつた。

私は思い返すたびそう思つてゐる。

だけどそれが間違つてゐるといつなら否定する。

間違つてゐるのは……その目的を間違えたまま使用する私た
ち自身だ。

9年前、優菜のお母さんであり私の叔母が経営してゐる帝楠学園初
等部に入学した。

そこに待つていたのは厳しいトレーニングの日々だった。

身体能力で決められたスポーツで上達しなければ別のスポーツへ飛
ばされる。

残りたければ他のものを蹴落とせ。一番でいる努力をしぃ。

あの頃の私たちはそう教えられた。

だからなのかあそこには“楽しむ”といつ言葉がなかつた。

私は身体能力値が高かつたらしくすぐ上達し、4年生になる頃には6年生を抜かせるほど強くなつていつた。

その頃からか、私の周りはいつの間にかどんどん変わつていつた。

先生達の期待、他の選手達の羨望と嫉妬、そして……憎悪。

それらが重なり混ざり合つた時私は孤独になつた。

“天才”という枠組みに入れられて。

そして中学校に上ると同時に“パーフェクト5”そう呼ばれていた。

そこには私のようにあるスポーツで周りよりも優れている人達がいた。

そして同じように自分の周りにある孤独を抱えて。

だからなのか痛みや苦しみが分かり合えた。

そして私達は完璧ではないと言い続けながらも期待に答えようとした。

いや、私達は知っていたかも知れない。

期待にこたえるために作られた私達の居場所だということを・・・

私は引退すると同時に家の近くにあるここ、東南高校へ優菜と受験しなんとか合格した。

バスケではほとんどと言つていいくほどの無名の高校を選んだため先生にも先輩や後輩にも反対された。

もちろん私の、孤独に満ちた栄光を知る者も。

唯一すべてを知つていてなにも言わなかつたのは“パーフェクト5”の人たちだつた。

実際スポーツ推薦という手もあつたし有名な高校のお誘いもきていた。

だけどそれはそれで私は嫌だつた。

私にとつて本当のバスケは友達だから。

あの頃の私と比較してみもこんなにも人に触れたのは初めてだった。

今までの私はいつも無口でただ練習に参加すればいい、そんなことしか考えてなかつたから。

あの先輩たちは言った。

『人は人と触れ合つことで変わる』と。

実際、先輩たちも変わつた。

そして、私も変わつているのかもしれない。

いつもして誰かに自分のことを話しているのだから。

「ユーリ、ここに来て良かつた？」

静かに聞いていた漸が喋りだした。

「うん」

いつの間にか離されていた手をまたギュッと力をいれ、抱きしめられた。

今日はなぜかあつたかい。

「ユーリ、好きだよ」

「だから・・・」

漸の目は真剣だった。

「いつこの言葉だけは真剣に言つてるのは知つてゐるナビ今日はもつと真剣だ。」

目が、離せない。

「どうして私にかまうの？」

心の奥にこる疑問をぶつけた。

だけどその答えは微笑みで消され漸はゆっくりと顔が近づけた。

その時の漸の目は愛しいやうに見つめていた。

初めて見せた表情に私はどうすればいいのか分からなかつた。

いや、このときは分かりたくなかったのかもしれない。

心の奥に住む自分の存在を否定することしかできない自分によつて。

ただゆっくりと近づいてくる漸。

あの時のような強引ではない。

だからなのかそれとも違う理由か私はいつもみたいに抵抗ができない

つた。

ゆっくりと触る唇は優しく私の唇を包んでいく。

何もかも消し去ってしまった。そうだった。

過去も悲しい感情もそして否定的な自分も。

その時、漸が一筋の涙を流していたことは誰も知らない。

夏休みが終わり秋大会の練習を・・・と言つわけにはいかなかつた。

忘れていたのだ。

私にとって最大の敵を。

「宿題」

「相変わらずいつも通り残っているわね」

宿題を忘れていた。

それはもう、すっからかんに。

一応小学校みたいに自由研究は無いからいいけど。

この量はちょっと・・・・・

「夏休みまでに終わらせるんだよ。」

終わったあとじゅ 夏休みの宿題にならないんだから

……とっても怖いです、優菜さん。

「 3つ終わった!!

一応ワークで数ページ（とこっても数が多いけれど）は終わらせた。

後は一冊一冊の割合で終わらせるばっかりついで終わるーー

「 1つにちわーーーー

・ ・ ・ なんか久しぶりに聞く声がある。

田で優菜を捕らえると同じ事を考へていていた。

なんか・ ・ ・ 嫌な予感しかしないのはなぜだろ。

「 悠理、優奈ちゃん、お友達がわざわざ来てるよ

わざわざ来なくてもいい人だと思いますーー

なんていえるわけでもなく、私たちはしづしづと云つていいほど降りる羽田になつた。

わづ・ づ・ 会いたくないよ。

「あ、悠理お久しぶり。優菜ちゃんも。

びっくりしたよ、あそこについたら一人ともいないもん。

説得してようやくここに来たんだからね

岸川とは違うさわやかさがあつて、学校の規定により坊主なんだけれど、多分髪を伸ばして短髪になつたらすぐにもモテそうな容姿の・・・迷惑野郎。

「なんでここまで来た、蒼」

「蒼喜君も相変わらずだねえ」

中学の頃私の川岸的立場だった中井蒼喜。

変な補足をすると優菜以外ではじめてあつた金持ちの息子だ。

そしてそつちもはじめてあつた庶民の娘だつたらしく。

それが今ではストーカーと化した。

「ん? 用件。

悠理分かつてゐると思ったのに

「分かつて、る？」

「去年の借り返してもひがひがつて。」

踏み倒す気はないよね？」

・・・うこえは借りはあつた。

去年私は宿題を手伝つてもひがつた。それと受験の勉強も手伝つてもひがつた。

それは借りとして返す条件だつたけれど秋じゅうからは手伝へ全くもつて忘れていた。

しかも終わり、ひがなつてへるのか・・・

「え・・・まだ終わつてないの？」

「・・・」

「そりなの。もひがん手は貸さないでね？」

優菜、何がしたいのかわかんないんだけれど。

私を置いて結託し始めた一人。

なんだか・・・嵐の予感がするのは氣のせいだらうか？

なんとなんとわざわざ来てもらひつて……宿題教えてもらひつてます。

ええ、貸しは増えましたが相変わらず頭のいい事で。

ぶつちやけ学校の教え方よりも分かりやすいかも……

それで夕方までに一日分の宿題を終わらせた。

もちろん意味するものはある。

まさか結託した理由がこれだとは思わなかつた……

「お泊り？ 優菜ちゃんじやなくて、その子が？」

「うん、お家の人人が約一週間ほど旅行しに行つてゐんだつて。

だけど部活で被つたから一人だけ行けなくて誰かの家に泊まつうつていう感じになつてお父さんが良いなら泊まらせてもいいかな？

優菜も泊まつてくつて言つてゐるから……

「別に良いけど。龍季や龍星の服もあるからそれ着てくれれば良い
し・・・・・ただ」

「ただ？」

「川岸君はいいのかい？」

「は？」

「なんでそこ川岸の話が出でへるの？」

「川岸君と付き合つてるんだろ？？」

事情が事情とはいえたから見たらそれは“浮気”に入るんじゃな
いか？

さすがに急とはいえた俺に言ひ前に川岸君に話したりどうだ

「「」めん、川岸とは付き合つてなこ」

あれは川岸の勝手な行動だ。

今思い出すだけでも恥ずかしいの・・・

「え？じやあ中井君？」

「いや、違う・・・」

「もしかして二股？やめてくれよ龍季の一の舞は・・・」

「全く違ひーー！」

なんで、にいみたいになるの？！

確かにあの人は普通に2人とか3人とか付き合ってるので断じて私はそんなことしない。

私は面倒ごとは好きじゃない。

それしこんな人は一人で十分！！好色とか絶対に嫌だ！！

「まあいいか。龍星も友達と旅行に行つて来てるし本来なら一人で寂しくいるところに来てもらつてるから構わないよ」

「ありがと」

まあそんなかんじで許可が取れました。

それに対しても彼に對して冷静というかテンションが低い。
どうしてだろ？

「はい、勝ちい～～」

「ええ・・・」

「相変わらず大富豪弱いわね」

「顔に出やすらんだよ、悠理は」

「出でない！－褒められるほどポーカーフェイスだつて言われたもん」

「それが出来まくつてるんだなあ～～」

「嘘だ！！」

絶対嘘だ。自信持つて言えるもん。

「はいはい、二人とも静かに。もう遅いし早く寝ようよ。

悠理と薺嘉那は、田代一でしょ？

ゆくくり寝たら？」

- そうしたな

「寝たくない・・・」

寝て起きたらこいつとデート・・・・想像したくも無い。

絶対注目の的。

「寝ないとキスするぞ~~~~~」

•
•
•

前例があるために寝ようか。

身の安全とこれ以上被害を受けないために。

こうして夜が更けていった・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6038o/>

太陽があたる場所

2011年9月1日09時50分発行